

See discussions, stats, and author profiles for this publication at: <https://www.researchgate.net/publication/280728569>

(7)

Article · January 2013

CITATIONS

0

READS

51

1 author:



[Naoto Higuchi](#)

The University of Tokushima

112 PUBLICATIONS 74 CITATIONS

SEE PROFILE

Some of the authors of this publication are also working on these related projects:



Nativism and the extreme right in Japan [View project](#)



Occupational status of migrants in Japan [View project](#)

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	「行動する保守」の論理（7）：「ネット右翼のカリスマ」Z氏の場合
Author(s)	樋口, 直人
Citation	茨城大学地域総合研究所年報, 46: 81-90
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10109/3581
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

「行動する保守」の論理（7）

——「ネット右翼のカリスマ」Z氏の場合——

樋口直人（徳島大学）

要約

本稿は、右翼運動の経験を持ち、現在は排外主義運動で活動するZ氏に対する聞き取り記録である。右翼活動家は、2000年代後半に現れた日本の極右＝排外主義運動に対して否定的だった。しかしZ氏の例から分かるように、右翼運動と極右運動は断絶しているわけではない。Z氏は右翼運動の直接行動のノウハウを用いて、極右運動に影響を与えている。同時にZ氏はインターネットを通じた発信に対する「ネット右翼」の反応を取り込んで、運動を拡大させた。つまり、Z氏は極右運動に影響を与えるだけでなく、ネット右翼からも影響を受けて、旧来の右翼とは独立した「行動する保守運動」が成立した。

キーワード：在特会、極右、排外主義

1. 右翼と極右の間——問題の所在

2000年代後半に勃興した日本の極右＝排外主義運動に対して、右翼とされる活動家の反応は——メディアに出るものに限ってみれば——否定的だった。だが、右翼と極右の間は断絶しているわけではなく、右翼の一部が「外国人問題」に関心を持ち、今の極右運動の原型を作ってきた。極右運動の最大手といえる在日特権を許さない市民の会は、このような右翼に源流を持たないメンバーしかいない。だが、直接行動のノウハウなどについては右翼経験のある年配の活動家に手ほどきを受けており、無関係というわけではない。

本稿で取り上げるのは、そうした年配の活動家のZ氏（60代男性）であり、排外主義運動の中ではもっとも本格的な「プロ」の右翼活動家といえる。単に右翼としての活動歴が長いだけでなく、早期から外国人排斥を訴えていること、インターネットを使って多くの読者を獲得してきたことも、彼の特徴として挙げられる。以下は、2012年3月23日に実施した聞き取り記録であり、読みやすさを確保するため適宜順序を入れ替えてある。これは、筆者が行ってきた排外主義運動の活動家に対

する聞き取りデータの開示の一環であり、これまでの経過については樋口（2012a-i, 2013）を参照されたい。

2. 国家社会主義者同盟と「外国人問題」への関心

（関心を持ったきっかけは）イラン人問題だよね。そこに住んでるからね、上野に。ここを毎朝通って——当時神田に事務所があったんで——そこ（上野駅近辺）を通ったわけですよ。その辺にイラン人がたむろしてて——日本人が歩けないくらいね、イラン人がいっぱいあふれかえってました。（上野公園で）寝泊りして出てきてね。で、こいつら何なんだろうと思うよね。その後テレホンカードの偽造、「カード買いませんか、カード買いませんか」って皆に売りつけて。結局、警察も何も全然関心を示していないんだよね、当時まったくね。それでやっぱ困るなと思って、イラン人を日本から出さなきゃしょうがないとなって。だから、最初イラン人追放運動ってね。

イラン人のことだし——要するに、何の目的もなくただ日本に来れば職にありつけるんじゃない

か、というのでロクな金も持って来ないで。金も持って来ないから公園に寝ているわけだね。とにかく来れば何かいいことあるんじゃないかという程度のことで来ているわけだから、必ず犯罪とかそういうのが起きるようになってしまったと思うよね。それがきっかけですね。

(排斥活動の母体となった国家社会主義者同盟という団体は) やっぱイラン人問題と大きな関係があるよね。あの頃作って、あの頃から(イラン人排斥) 活動始まっているわけだから。最初、国家社会主義者同盟ったらイラン人追放ですよ。そのために作ったわけじゃないけど、たまたま作った頃にそういう問題が——一番大きな社会的問題として取り上げられたんで、そっちのほうにやっぱり運動の矛先が向いていったんじゃないかな。

(名前はナチスを意識しているみたいだが) 関係ありますよね、確かにね。でも、ドイツのナチズムを日本に持って来てさ、定着できるはずもないしね。ナチズムと日本の国家社会主義ってまったく異質なものだからね。人は同じように捉えてるけどさ、やってる方は全然同じものだと思わないからね。ちょっとでも勉強した人ならわかるけどね。(戦前との連続性が強いわけですか) 国家社会主義者同盟とかあったからね。そういう流れだね、そもそもね。

思想的に集まってきた人はほとんど皆無ですよ。10人もいなかったでしょ。そういう思想を持っているのは10人くらいかな。みんなそれぞれ仕事とかやって——当時、協同組合みたいな発想じゃないですか。建設業の協同組合が母体になったんです。組合が順調に伸びてたから、その延長で国家社会主義者同盟を作ってたから。

だから思想なんかじゃなくて、その組合に入っていれば公共事業に携わることができるとか、あるいは談合にあって有利とか。そういうことで、ほとんど組織ってのは増えてったんです。1000名近くまで名簿上は行ってたわけだけど、それは組合活動だよ。組合が埼玉とか東京とか長野とか、あちこちあった。組合が不景気とともに破綻してからは、結局ダメになっちゃった。思想性を持っ

た組合員はほんの一部なんで、そういう人たちだけが残ったわけ。仕事があってね、たとえば1つの組合で年商10億やったとしますよね——まあ軽く10億やっていたから——そうするといっぱい付随する産業があるじゃない。そういう人たちの賛同を求めながら、ピラミッド的な組織を作った。ヨーロッパの極右政党みたく、反グローバリズムとか、そういうしっかりした思想性があってやってたんじゃない。それはやっぱり、崩れるのも、なくなっちゃうのも早いよ。

(思想持っていたのは右翼的な人だったか) もちろんそうです。実際逮捕覚悟でやっているわけだからね。だって公園に行って殴り合いになればさ、当然両方逮捕される。何で逮捕しなかったのかわからないけど。警察だってイラン人なんか捕まえたってさ、通訳つけなきゃいけないし、どうせ喧嘩してるのは右翼だから。死んだりしたら困るけどね、小競り合いくらいなら……。でも正直言うと怖かったけどね。彼らのほうが強かったものね。体も大きいしね、若いし。私はね、その後、何の理由だったかわからないけど、東京都の公園管理局の人間と話し合う機会があったんだよね。その人たち言ってたものね。あなたたちだけが反対していたけど、実際には違って、一般の都民からの苦情がすごかったんだって。肉を買って来て食べさせたんでしょ、保健所が何でこんな放置しておくんだとか。子どもが「体がでかくてもじゃもじゃしてさ、怖い人がいる」とか。

我々は思想性持って、時代の前衛みたいに——未来の尖兵みたいに使命感を持って動いてたけど、そういうのは極少数だけど、嫌悪感を持って眺めていた人はたくさんいたわけですよ。日本人というのは、そんな寛容な社会じゃない。

具体的には、結局、入国してくるのをまず阻止しなきゃならないからね。当時ノービザだったんですよ、外務省がね。要するにノービザをやめさせると。まずビザを取得しなきゃ入って来れないという風にしたのが1つの成果だよ⁽¹⁾。次の成果は、公園に寝泊りしていたから、公園に言って。暴力事件に発展してね——暴力事件に発展すれば、

そこを管理している東京都の都市公園課というのがそのまま放置できないから、管理事務所が公園を閉鎖したんです。閉鎖したから行くところなくなって、実質的にそれが止まって。たむろしているやつらがたむろできなくなって帰国した。で、極端にずっと減っちゃって。結果的には犯罪組織と、覚醒剤とかそういう犯罪組織は根強く残ったんだけど、あとは日本人と結婚したりした人は、ビザも当時下りましたからね。ダルビッシュの親みたいだね。ああいう人は日本社会に溶け込んだんだけど。そういう形で解決した。ただ解決してないのが犯罪組織だけが残っちゃった。今でいうと覚醒剤の販売の60%以上はイラン人が牛耳ってるからね。

（排斥的な関心を持っているのは）僕だけじゃないと思うけどね。誰にはばかることなく話と言えるっていう、極端な主義主張を掲げてるから。あえてその自分がそういうことを言わない限り、誰も言わないからしょうがないから言ったということであって。やっぱりそれは、日本とか単一民族国家という概念を訴えてんですよね。だからそこにいろいろな人が混ざってくると、単一民族国家そのものが崩壊してくるから。それは守らなければならないという立場だから、こういう感じで言ったんだ。

そうすると必ず議論があって、じゃあアイヌの人はどうなんですか、琉球はどうなんですかと質問が来るんだけど。単一民族国家概念というのは、宗教とか言語とかそういうものに絞っちゃうと、明らかに信じてる宗教も違うし、アイヌ人とか琉球とかね、言語も違って。だからそういう概念じゃないんですよ。私の概念というのは、日本列島と称するところに同じ時代に住んでた人、それをひっくるめて単一民族というんだ。というのは、日本に住んだ後に世界的に広がるでしょ。でも国家というのは1つの領土があって国家であり、そこに住むのが国民であり、民族という概念の——領土というのが基本にあるんです。領土が基本にあるから、言語とか宗教とか関係ないから、そこに住んでた人が同一国民であり同一民族だという概念

ですからね。そこはあまり議論が噛み合わない。インターネットでも何度となく議論してきたんだけどね。前から住んでる人は日本民族だけけど、後から来た人は外国人ですよ、という感じですね。どこまで過去をさかのぼっていくかという、大体明治維新以降くらい、場合によっては戦後社会に限定してもいいけどね。戦後日本にやってきたのは、明らかに外国人。

3. 「在日」に対する関心

（在日コリアンはどうなのか）いや、明確にねえ・・・私はやっぱり外国人問題で在日を意識した頃というのは、ネットがどんどん盛んになってきてね、ネットの中で結局国境問題でも竹島の方を重視しているような方がネットで多く見られて。反朝鮮ね、そういう流れができつつあるという中でやっぱり、意識してきたんじゃないかね。前からのブログの中でね、自らが反省ってのを挙げてるよね。在日問題ってのを十分知らなかった自分に。

（90年代まで関心がなかったのは）まあいないからね、外国人ね。在日ってあんまり関心なかったね、正直。仲良かったしね。韓国人なんか、在日韓国人は右翼活動やってたからね。朝鮮総連は北だからね、共産主義者だから。反共運動というのがあるから、当然韓国とは仲間だと思ってた、当時。民団なんか日教組大会の時、金持って来たからね。「カンパです、使って下さい」ってね。どこの団体も金もらってましたよ。

だから在日問題を外国人として捉えたことはないし、それに彼ら自身もパチンコ産業がこれほど大きくなる前は、自分たちが在日だってことについて、なんていうのかな、自分達の自己主張をね、これほど高めてきたということは、ここ10年くらいであって。私は活動——外国人、イラン人追放とかいった頃は、関心持ってる人は持ってたのかもしれないけど、私はまったく関心がなかったね——朝鮮人とか韓国人問題には。共産主義打倒とかそういう意味での関心はあるよ。あくまでの北朝鮮だけだよ。共産主義者だからね、北朝鮮は

ね。もちろんそれ（反北朝鮮の活動）はしてまますよ。

自分とネットの意見とのかなり乖離があって、反韓国とかね、韓国は仲間じゃないのかということとを段々言われるようになって、「ああなるほど、そうか」という風に思うようになりました。ネット始めてからですね。ネットで書かれてることを読みながら、そういう風に自らも反省していく。

私はねえ——帰化運動ね、韓国人・朝鮮人の帰化運動を一番最初にネットで提唱したのは私だったんです。これには理由があって、私はね、帰化とは——お父さんが朝鮮人、お母さんが日本人。両方の国籍があるんですよ、その子どもはね。でも、朝鮮総連が昔、日本国籍返上運動ってやったんですよ。だから、日本国籍はいりませんよと、ちゃんとお母さんの同意をもって日本の法務省に届けたんですよ。だから、それが物心つくようになって両方も朝鮮人じゃなくて、片方は母親日本人だからだとね。そういう人については、「じゃあとんでもない、俺は日本人だ、日本国籍持っているはずだ、日本人だ」と言っても、「あなたが幼少のころに日本国籍返上しているから、あなたは日本国籍持ってませんよ、あなたは外国人ですよ」とやってたんですよ。

要するに、片方日本人なのに日本国籍がないと。日本国籍を取りに行ってももらえない、それはどう考えてもおかしいだろうと。それが本人が子どもうちに自分の意思が表明できないうちにね、決められたことだから。それはその法律改正でもって、今は18（歳）だか二十歳になったけど、自分で国籍を選べるようになったんですよ。それは問題なくなったんだけど、昔はそれができなかったんで、片方の親が国籍を持つ親に対しては、日本国籍を持つには、帰化するしかないわけね。そういう風に日本人への帰化運動を提唱したんです。

反対派、私の過去を「Zはかつてこういうことをやったやつだよ」と、左翼とか人権派が私を批判するためにやるんだよね。私の名誉、運動歴をあんまり貶めるようになっていないような気がする。逆にさ、私はかつてそういう差別感とか、民

族的な差別感とかまったくない人間なのに——ない人間ということがはっきりしてるわけだからさ。やってたわけだからね。最近書くやついなくなったね。

4. 「外国人問題」関連の取り組み

確かにイラン人問題は深刻に捉えてたけどね。で、その次が今度中国人の不法入国だね。ポロ船で来たりさ、蛇頭とか送り込んできたりね。そういう問題でいえば関心が強まって。だから、外国人犯罪であって韓国人問題には関係ないとかだよね、多分ね。ただ、あの辺というのは、まだネットがそれほど——あるにはあったにしても——ネットがそれほど、なんというのかな、ネット右翼といわれるものは、大きな力を持っていなかった時だから。あんまり反韓国とか反朝鮮というのはなかったんじゃないんですかね、今よりはね。多分——と思います。ほとんど関心がなかったね、北朝鮮という国家を除いてね。まあ北朝鮮に対しては、これはもう敵対国家だからね、明確に敵だと思ってたが。北朝鮮というのは、そのころソ連もあるしね、旧ソ連が崩壊してない頃だと思うから。ソ連の方は強大な脅威であって、北朝鮮なんか何の脅威も感じれない時代だよね。

（他の右翼は）まったく関心持ってなかったね。逆に私がある右翼団体の——鈴木邦男さんと鬼塚英昭、その人と3人でパネルディスカッションに臨んだときに、私に対する批判が当時の右翼の民族派の中から、「何でそういう人種差別をするんだ」。右翼は大アジア主義だから、イラン人だってアジア人だから、とつるし上げられた。大アジア主義。アジアは1つみたいな。そこまで何で拡大する必要あるのか。大アジア主義とかそういうのじゃなくて、日本のことを世界観の中で考えれば、イラン人は全部別だと。そういうものは当然排斥してしかるべき。

問題意識を持っていない人が、右も左も含めて、世間一般も含めて・・・段々偽造カードが、販売で生計を立てるみたいなのという形になってきて、社会問題化して。それまでは社会問題化する人い

なかったんじゃないんですかね。

中国、朝鮮人を除けば一番日本で最初に問題になったのはフィリピン人ですよね。どこの繁華街でもフィリピン人が、フィリピン人の女性が働いて。観光ビザでやってきて、就労ビザもなく、いろいろ商売で。男はフィリピン人みると家庭を顧みず、フィリピンの女の子に惚れたとか問題起こして、フィリピン人の問題が最初。その次イラン人。あとバングラデシュとかあいうのが不法就労で入ってきて。それはそれほどでかくないね。その次が中国人ね。シナ人が——やっぱりシナ人の場合は、ボロっちい船で来たからね、余計社会問題がでかくなったし。ピッキングだとかサムターン回しとか、次々と日本人が考えつかないような窃盗技術を編み出して、被害者が相次いだから。外国人犯罪というのはそういうレベルで。

外国人犯罪、凶悪犯罪とか警察の仕事なんですね。だから我々は不法就労というものは犯罪としよう、やってた。一番の成果は——全体の中で一番の成果というのはね、今も法務省オーバーステイと言う、ところがオーバーステイじゃないんだよね。違法だから、Illegal なんかかっていうんだよね。新聞もね、不法滞在者っていう名前を使わないようにしようと、超過滞在者って名前を使おうと。その時に私が各社に全部質問状を送って、観光ビザで入ってきているというのはね、超過滞在というよりは明らかに違法なんだから、名前を変える必要があるんじゃないかという運動を起こしてね、それは新聞社が引っ込んで。今も不法滞在者という名前が残ったんですよ。我々がそういう運動をしなければね、不法滞在という名前は完全に消えちゃって、超過滞在者とか名前を変えられる可能性もあったんだよね。今も法務省はオーバーステイって使ってる。オーバーステイというのは不法滞在者じゃないんですよ。それがなんで不法滞在者っていう風に英語で表記しないんだと。そういう取り組みは、あまり最近やっていないけど、随分法務省に行きましたよ。そういう小さなところから積み重ねてくるからね。やっぱりイラン人追放と不法滞在者っていうことを明確に国

民世論に訴え啓蒙してね、それを超過滞在は不法滞在なんだっていうことを知らしめたというのが、まあ私達の成果だったんじゃないかね。

中国人の不法就労とかね、あれは不法入国——観光ビザも何も関係ないわけですから、中国人はね。不法というのはもともととんでもない話ですから、みんな社会が関心を持ってね、取り締まると。それは別に我々が言わなくてもそういう世論って起きたけど。我々があえてやって、超過滞在と不法滞在とに、その線で——やっぱり一番の成果じゃないかね。あんまり世間的には知られてないけど、我々が活動した成果なんです。

もう1つ注目されるのは、自民党の小泉政権の時代のマニフェスト、不法滞在者を5年間で半減して——あれはねえ我々の働きかけによってできたんで。あれは本当にマニフェストのね、5番目くらいに不法滞在者を5年で半減——大きな選挙公約で社会・話題になるはずなんだ。ところが新聞なんかどこも報道しないし、他の政党はそのことに対してどこも追及しない、自民党の政策に対して何も問題にもしない、そういうことがあったね。長年の活動の中で思い当たるというのは、そのくらいだね。だから、何で自民党が不法滞在者を5年で半減ってマニフェストで謳ったときに、どこの政党もそのことに対してまったく触れなかったのか。何で触れなかったのか、不思議といえば不思議だよ。

要するにだからタブー視してたんだね。不法滞在者の存在すること自体を認めたくない、自分達と立場が同じなんだ。要するに地球市民みたいな感じだから、不法滞在者という言葉を作ることさえもできないって。そういう風に——何かにかかったような形になってるんじゃない。反対派とか人権派とか——反対派というのは我々に対する反対の人たちね。それは間違いだったというのは、まず歴代の総理大臣で「外国人が日本にやってきたらば、暴動が起きるから外国人を受け入れるべきでない」と国会ではっきり明言したのは、小泉首相ただ1人なんですよ。はっきり言ったんだ。私のブログで検索すれば出てきます。外国人

が来ると暴動が起きる、暴動が起きる可能性があるから、安易に受け入れるべきでない。すごいよね。それもどこの新聞も日本の新聞取り上げなくて、アメリカの Times 誌、何かアメリカの新聞社がそれを次の日に報道したんです。それも私のブログに出ていますよ。その辺がおかしいんですね。外国人問題をタブー視しているんです。

(外国人参政権に関心を持ったのは) 外国人参政権問題が浮上してからだよ——ネットだね。外国人参政権を民団なんかが強くて求めてきて運動が盛り上がってきて、日本の社会もそれを受け入れるか受け入れないかという両論が出てきて、そういう中でネットなんかでは絶対ダメだ——人権擁護法案と外国人参政権というのは——という流れがあってだよ、正直いってそういう問題を考えるようになったのは。それまでは、外国人参政権を与えることによって、世の中がどう変わるかというような議論よりも、今外国人がいることによって犯罪が起きているとかさあ、外国人がいるいろんな問題があるとかね。現実はそのような問題に関心を持ってきたんで。関心はやっぱりそういう問題かね。

5. 「パチンコ問題」と「在日」

パチンコ産業の問題が一番の外国人問題と今思っているよね、これを何とかしなきゃだめだなど。20兆円近くさ、こんな現金賭博でね、一切賭博行為が禁止されているにもかかわらず、大っぴらにやられてる。韓国ではどうに禁止されているのにさ。韓国で禁止しているのに、なぜ日本の社会ではそういうのやってなきゃいけないのか。そういう問題は、自分の人生の集大成として取り組もうとしているから、あんまり外国人参政権の問題とか人権擁護法案の問題とか、いろいろな問題よりも、これに特化して——というのは犠牲者がハンパじゃないのよね。毎日毎日パチンコ代がなくてさ、横領したとか金盗んだとかね。売春に走ったり。俺もねえ、ネット始まる前ってのは——俺はネット始めて今年で7年目ですかね——パチンコ結構大好きでやってたんだ。自分の玉積んでると

さ、女の人が寄って来てさ、脇に座って話しかけてきて売春を持ちかける。実際に両替してて襲われて、換金したばかりのカードを盗まれたって……。やってる時には「ああそうだろう、そうだろう」くらいだけど、こんなことやっちゃいけないなと思って。そういう考えになったよね。

やっぱりどういったものでも広がりすぎると求心力が衰えちゃって、求心力を取りもどすためにやっているのがパチンコの問題。反パチンコっていうのがどれだけの求心力を持つか……。掲示板を作ったりしてやっています。いろんなことやってきたけど、今までにないくらいの賛同者が得られる可能性がある。ネット上で発信を始めたら、1年間で1万人くらい集まるんじゃないんですかね。1年間で1万人集まれば、まあ2年3年で3万人くらいですね。私は65(歳)で引退するつもりなんだけど、65歳まで5万人くらい全国で集められれば、全国支部作って。今在特会が1万人と言ってるけど、在特会凌ぐだけの団体になると思う。パチンコってね、相手が明確だから。在日特権というのはあまり明確じゃないわけですね。パチンコっていったら、みんな損してるから明確。あんなもの必要ないって。1回やってそう思ってるから。だから今、反パチンコが最大のテーマだろうなと思う。

近年のネット上の盛り上がりですよ。2ちゃんねるのニュー速サイトを見ているけど、パチンコのスレッドが常にあるし。スレッドを上げる人も関心持ってるし。見てる方も書き込みが、一番こうね、動きがいいですよ。パチンコの動きが。最近パチンコを批判的に捉える人が結構増えてきているしね。大阪のあいりん地区でパチンコやっている人たちに質問していたの。生活保護で生活したりすると息苦しいからね、「パチンコくらいやらせてよ」そういう声があって。そういう声があれば、なんだふざけるな、何で俺が働いた税金がね、そんな生活保護でパチンコなんて、冗談じゃないよ。そういう、きわめて常識的な意見が出つつあるよ。昔はそういう元気がなかったけどね。世知辛い世の中とかお金がなくなってる

から、「生活保護費をパチンコに」——ふざけるなという話になるしね。

民団自らがパチンコを自分達の基幹産業って言うてるから。大韓民国側の大統領は小沢と会った時に、「在日の基幹産業であるパチンコを、規制が厳しくなっているから何とかしてください」と言うてるわけだから。パチンコ＝韓国人だ朝鮮人だというのはおかしいと言っているけども、それはだめなんですよ。彼ら自身が言ってきた話であって、道理が通らない。

今回、一番聞きたいと思う話をさせてもらえば——ネットでは書かないけど——はっきり言えば現代のユダヤなんだよ。1930年代のドイツ国内におけるユダヤ人問題と2012年のパチンコ問題の在日とユダヤ人はダブって見えるんだよ、私には。ユダヤ人とか他の人を顧みずに自分達のために金利を稼いで高利貸をしていたわけだから。それで稼いだお金をドイツの政権内にばらまいて、自分達の地位を築いてきたわけですよ。その時に、資本主義社会の中でそういう風にユダヤ人はそれなりの力を発揮しながらね。それでもう一方の対峙する共産主義の運動とか思想はユダヤ人が作り出しているんですよ。

今の在日は正しくそういう風に私には見えるよね。一部の人間が20兆円の産業を牛耳ってさ、どれだけの利益を上げているかわからないわけだよ。でもその一方で、生活保護費に頼らなければ食っていけないような在日がいっぱいいるわけです。そういう問題を、同じ同胞なのに「そっちはそっちで国が面倒みなさい、我々の権利はよこしなさい」。そういうのは、当時のユダヤ人の発想とまったく同じ。そう見えるんだよね。結局当時、ドイツ人にとってユダヤ人はよそものだった。ドイツだけがゲットー作ってユダヤ人閉じ込めてということではなくて、フランスでもどこでもあったわけだからね。それとダブってみるし。日本の社会に、いろいろなところに影響を与えてきたんだ、というのがあつたよね。

6. 「右翼」と「極右」

ネットで極右と名乗ったのは、従来の右翼と違うということ、やっぱり強調するためだし。ネットから離れて実社会に植えつけてこうという場合には、右翼というよりは——当時ヨーロッパに台頭していたわけだから——極右と名乗ったほうがいいってというのが大きな理由だからね。やっぱり一種の差別化として使ったことは事実。何が違うかっていわれれば、いろいろ違う面はいっぱいあるけど、民族的な問題と外国人排斥とが一番違ったところだよ。そこにイラン人問題とか中国人問題とか。今は中国人が圧倒的に大きくなってらるんだけど、批判されている中では反韓国・反朝鮮という外国人・・・。

私が選挙に出た頃、あの辺はやっぱり（活動の）最高潮だったんじゃないの。私の人気ブログランキングはあのころ極右評論、それが人気ブログランキングトップで——維新の党・新風から立候補した時ね——全体の。なおかつ私の個人の名前を書いたひとが14,700人もいたわけだからね。私の個人の名前だからね。ネットで書いてるだけだから、ネット見て私の主張に強く賛同した人というのが全部でそれくらいいたのは、紛れもない事実であつて。その数っていうのは、今、私を支持した人がそれだけの数いるかどうかという疑問だけどね、分散していろんなところに出てきた。（選挙戦の時に手応えは）ないですよ。実態は、ネット喫茶とかああいうところに泊まってるわけだからね。お金がないからね。ネット喫茶に泊まって全国歩いたわけだからさ。最近ネット（カフェ）で寝泊りしている人間っていっぱいいるよ。あの頃はそんなにいなかったよ。

（ブログへのアクセスは）随分少なくなりましたね。（ピークは）昨年か、一昨年、中国の尖閣が来た頃だね。あの時、仙谷が出てきた、あの時、1日4万。私は何を考えてるんだろうということ、見に来る人が多いんだよね。あの時の愛国の盛り上がり、民主党政権があつた映像を見せない、しかも限定して国会議員にしか見せなかった。そういう理不尽さに対して国民が反発した。やっぱ

反発なんだよね。今の運動は反発なんです。韓流とかすべてね。明確にいろいろな現象に反発しましょう——それが1つの方向にまとまって、というそこまでは言ってないね。やっぱりリーダーがないんですよ。運動というのはリーダーがいて初めて大きな流れを作るんであって、ナチズムだってヒトラーがいたからできたんであって。日本の場合そういうリーダー的な人が出てくるのかどうかって、非常に疑問ですよ。

実際、(行動する保守)の中には右翼団体やってた人いないからね。右翼団体を経て活動しているのは私くらいなものだからね。保守系のデモを組織しているね、ああいう人たちは右翼団体の活動経歴がないんで。私自身は「極右」って普通の人は違った考えですよ。日本の右翼はいわゆる暴力団的な体質を持っているし、そこからなかなか逃れることができないし。極右の場合、昔からやってる人たちは、自分の仲間じゃねえなと思っちゃうからね。交流は自然に消えていったという。右翼団体とか右翼活動している人には1人もいない。パチンコなんかやってるのね。私なんか旧来右翼の出身者だったけど、そういうことで書いていけるというのは、今現在そういう人との付き合いがまったくないんですよ、しがらみが全くない。他の人たちにはできない。何らかのつながりがあるから。

極右が伸びた？そうじゃないよね。極右をどう捉えるかというだけであってね。今ネットで活動している人たちを——ネットウヨを極右と見るかどうかという。ヨーロッパのように体系的に極右政党みたいな形できちんとしているところは、どこもないからね。韓国のテレビ局がきて、ネットウヨとかどこかに指令塔があってそこから金が、統一がとれていると理解した、そういう風に思って取材してるらしいね。それもまったく認識が違うよね。

極右ってやっぱりさ、移民反対、自国民優先、それが最大の柱だからね。そこで反共、というのが反共産主義があるんだけど、いい悪いにしたらって自国民優先の外国人排斥だから、それが極右だ

から。国内において一水会が我々を批判しているんだけど、批判している人がフランスの極右を受け入れている。これはちょっと。あそこはそういうイベント屋だと思ってるから、わたしは。思想的に考えたら本当に矛盾してますよ。どう考えてもおかしい。

(政治的には)今も自民を支持してますからね。新風と自民党以外は投票したことないからね、私はね。私はね、自由ってのが一番尊いと思っているんだよね、自分で考える自由。強制されるような自由とか、そういうのは昔からいやなんだ。ナチズムなんていうのと矛盾していると、人なんかは思うかもしれないけど、私には一番基本的な部分なんだよね。自民党だよ、やっぱり19歳の時から入党してるからね。基本的に自民党だからね。一番の政治活動は自民党だからね。自民党があまりだらしがないから、右のほうに走っちゃうわけで。逆にいえば一番自民党を支持していたと。

(具体的な関わりは)小泉内閣時代の不法滞在者の犯罪。あまり根回し的なことは、裏で何かしたりするのは好きじゃないし、そういうのでもないんだけど。あの時は自民党に働きかけをして、自民党からそういうことをさせなければ、いつまでたっても・・・という思いはあったから。たまたまその時そういうパイプがあったから、そこに熱心に働きかけたけど、そこから小泉首相に直接話がたって。小泉首相はそういう考えを持っていたから、ああいうアイデアがああいう感じ(「不法滞在者半減」)であらわれたんだね。

新風で活動したというのは、長らく街頭でやってて、新風のほうから選挙で出てみないかという話があって。今年は断ったんだけど、たまたまその時候補者が誰も出なくてね、引き受けざるを得なくなったというか。私は自分が長いこと——自由か共産かという二者択一の政治運動が最初のきっかけなんで。(極右に対する期待は)あまりないですね。本音の部分として、普段はあまり言わないことなんですけど——慶応大学の学生達が三十何人、私の話を聞きたい、私は講演したんです。そこでいろんな質問があって、その質問の中でね、

今の社会における極右的な主張をする意図とか目的を尋ねられたんです。だからね——ネットだとそういうこと書いちゃいけないことなんだけど——これから前途ある若者だから、「私みたいな人間がやがて台頭する危険性があるよ」と。このままの社会にしておく。そのために今主張しているんだと、自分の主張を広めようということではなくて。自分みたいな極端な、こういう過激な主張する人間が、このまま放っておくとなくなっちゃいますよと。民主主義をきちんと守っていかないと、民主主義を否定する人間が出現するんだと。しかも私はネット上で非常に危険な人物といわれるかもしれないけど、皆さんと接した時に皆さんどう思いますか、普通の人でしょ、普通の人の変貌する、そういう社会になる。私は自分でお手本を示しているだけなんです、そのために存在しているんですよ。そういう説明しているんですよ。自分で何かを成し遂げたいとか、こうしないとというのではなくて、こういう社会状況を皆さんが放っておいたら、必ずそのうち私のような人間が——私は年老いちゃったけど、仮に私が若くて、ハンサムで文章がうまくて、そういう人間が出たらさ、ぱーっといっちゃう危険性が世の中には存在しているんですよ。

7. 結語に代えて

排外主義運動の中でいえば、Z氏の遍歴はヨーロッパの極右ともっとも類似している。とはいえ、排外主義との最初の関わりを持った「国家社会主義者同盟」は、別にナチズム的な人種主義を導入するものではなく、戦前の日本のファシズムを意識したものだった。また、組織自体は建設業者の談合の隠れ蓑であり、右翼に名を借りた同業者組合のようなものだった。それが外国人排斥へと傾くのは、思想的な動機にもとづくというよりは、もっと偶発的ないし陳腐な経験にもとづく。

1991年には「上野公園で寝泊りするイラン人」が確かに耳目を集めた（町村 1999; 東京大学医学部保健社会学科研究室 1992）。1990年前後における「外国人労働者の流入」は、目立った外国人

排斥運動を生み出さなかった（Szymkowiak and Steinhoff 1995）。氏の住居兼事務所は上野にあり、そこで「イラン人の流入」を眼にしたことで、排斥——というより嫌がらせを始めるようになっている。これ自体は、氏がいうように10名程度の活動でしかなかったし、排斥運動と呼べるような広がりがあったわけではない。「イラン人の流入」が下火になってからも、氏は「外国人犯罪」をテーマとした著作を発表したり、インターネット上の活動を続けていたが、社会的影響力は皆無に近かった。

それが変化するのは、「在日問題」を取り上げ標的とするようになってからである。氏は、近年まで在日コリアンに対しては関心がないと答えており、韓国とは反共で利害が一致、北朝鮮とは反共から敵だったがソ連に比べれば存在は小さかったという。これは伝統的な右翼の典型的な態度であるが、ネット上での活動を通じて彼は嫌韓・嫌中へと舵を切っていく。ここで彼が吸収したのは、右翼イデオロギーとは関係のない若年層の意識であり、それが「行動する保守」として排外主義運動の基盤となった。『嫌韓流』が何らの妥当性もない言葉を連ねつつも、一定のまとまりをもった嫌韓意識の醸成に言葉を与えたように、Z氏のブログは嫌韓を排外主義に結びつける役割を果たした。彼の場合、直接行動に携わりそれを発信したことで、言論にとどまらず排外主義運動への参加を促したともいえる。

ソ連崩壊以降、右翼が敵手を見出しかねて衰退していったなかで、彼は「外国人犯罪」を新たなターゲットとして活動してきたが、動員として成功を収めたとはいえない。「ネット右翼」から学習し、それに影響されることで初めて、彼の排外主義は運動として拡大することになる。ある意味では、「外国人犯罪」「在日問題」と新たなテーマに飛びつく「柔軟性」が彼の特徴であり、「行動する保守」と自称する独自の集合行動を生み出したといえる。

「外国人犯罪」はともかく、彼が「在日問題」に関心を向けるようになったのは、インターネッ

トを通じた発信に対する反応を取り込んだゆえのことだという。これも「柔軟性」のなせる技であるが、Z氏はネット右翼の妄想に絡め取られた結果として「ネット右翼のカリスマ」になったともいう。政治的企業家として新たな需要を取り込んだともいえるだろうが、影響関係の因果でいえば、Z氏もまたネット右翼の影響を受ける側にいたことに変わりない。そこで知己を得た活動家が「リアル」で会することで、旧来の右翼とは独立した「行動する保守運動」が成立した。在特会とZ氏の違いは「ネット」ではなく「リアル」の活動が先立つことにあり、旧来型右翼とZ氏の違いは「リアル」より「ネット」を活動の場としたことにある。Z氏は、この相違ゆえに旧来型右翼から「行動する保守」へと接近し、「外国人労働者排斥」は「在日特権」の敵視へと転換したのである。

〔注〕

(1) イランと日本の査証相互免除協定が停止されたのは1992年4月だが、これは「活動の成果」としてもたらされたというのは、因果関係からすれば明らかに間違いだろう。それ以前の1989年にバングラデシュとパキスタンとの査証相互免除協定が停止されており、その前例にならただけのことである。こうした因果関係の解釈で疑問を生じさせる部分は多々あるものの、本稿ではあえて検証せず語りをそのまま起こしていくこととしている。

〔引用文献〕

- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理 (1)~(7)」『徳島大学社会科学研究』25号.
- , 2012b, 「在特会の論理 (8)~(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012c, 「『行動する保守』の論理 (1)~(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012d, 「在特会の論理 (10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
- , 2012e, 「行動する保守の論理 (4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.

———, 2012f, 「排外主義運動のマイクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.

———, 2012g, 「在特会の論理 (11)~(14)」『徳島大学地域科学研究』2号.

———, 2012h, 「『行動する保守』の論理 (5)~(6)」『徳島大学地域科学研究』2号.

———, 2012i, 「在特会の論理 (15)~(18)」『徳島大学社会科学研究』26号.

———, 2012j, 「与那国島が乗っ取られる!?——国境の島からみえる排外主義」『Migrant's ネット』156号.

———, 2013, 「『行動する保守』の論理 (7)」『アジア太平洋研究センター年報』9号.

町村敬志, 1999, 「グローバル化と都市——なぜイラン人はたまり場を作ったのか」奥田道大編『講座社会学 都市』東京大学出版会.

Szymkowiak, K. and P. G. Steinhoff, 1995, "Wrapping Up in Something Long: Intimidation and Violence by Right-Wing Groups in Postwar Japan," T. Bjørgo ed., *Terror from the Extreme Right*, London: Frank Cass.

東京大学医学部保健社会学科研究室, 1992, 『上野の町とイラン人——摩擦と共生』.

〔付記〕

科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。

(ひぐち・なおと 徳島大学総合科学部,

higuchinaoto@yahoo.co.jp)